

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 兵庫県神戸市灘区六甲台町1-1  
管理機関名 国立大学法人神戸大学  
代表者名 学 長 武 田 廣 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日(契約締結日)～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 神戸大学附属中等教育学校  
学校長名 藤田 裕嗣

3 研究開発名

地球安全保障への提言を目指す「グローバルキャリア人育成神戸モデル」

4 研究開発概要

国立大学附属学校及びユネスコスクールである特色を活かした次の3点を核とする「グローバルキャリア人育成神戸モデル」の開発と実践

- ①課題研究を核とする教科横断型体系的グローバル人材育成カリキュラムの開発
- ②国内外での圧倒的なグローバルアクションプログラムの実施
- ③高大一体による実践を支える確かな調査研究の推進

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程 ●は新型コロナウイルス感染症対応策による臨時休業措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①課題研究支援	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○	●
②国際交流支援		○		○	○			○	○	○		●
③調査研究の支援		○			○				○	○	○	●
④高大連携事業	○		○	○				○				●

## (2) 実績の説明

### ①課題研究支援

- ・課題意識育成に向け「社会基礎学連続リレー講座」(6・7月6日間, 計12講座)に4, 5年延べ79名が参加した。
- ・大学教員, 石川慎一郎(大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター教授), 林創(人間発達環境学研究科准教授)が, 4年~6年(計403名)を対象に, テーマ設定, 調査方法と分析, プレゼンテーション指導及び優秀者発表会における講評を行った。
- ・以下, 大学研究室におけるインターンシップに4年生徒が参加した。人文学研究科(心理学)6名, 文学研究科5名, 国際人間科学部6名, 海洋底探査センター3名, 医学研究科11名, 工学研究科2名, 都市安全研究センター8名, 農学研究科17名, 国際協力研究科20名, 海事科学部1名, 海洋安全システム科学科3名 計82名。

### ②国際交流支援

- ・文学部の支援で, オックスフォード大留学生との交流(6月)を実施した。(4, 5年249名対象)
- ・SGH集大成のイベントとして, 神戸大学主催「Global Forum」を神戸大学百年記念館(六甲ホール)にて開催。シアトルICS生徒24名, ベトナムFLSS生徒4名を受け入れ, 国際的課題についてグループでディスカッションし, 提言をプレゼンテーションにまとめて発表した。
- ・神戸大学ジャンモネCOE主催シンポジウム(7月)を本校で開催, 1~5年41名が参加。講師①: 神戸大学経済学研究科 吉井昌彦教授(兼副学長, Jean Monnet Chair), 演題: 「EUの移民・難民問題とポピュリズムの台頭」, 講師②: 神戸大学大学院国際文化学研究科 坂井一成教授, 演題: 「Brexit後の日英・EU関係」

### ③調査研究の支援

- ・石川慎一郎監修「グローバルキャリア人意識調査」を全学年(784名)を対象に12月に実施。
- ・林創監修「批判的思考力テスト」を4~6年(409名)を対象に7月に実施。

### ④高大連携事業

- ・4月 神戸大学農学部との連携講座(6年生9名参加)
- ・6~7月 神戸大学連続リレー講座(6日間: 4, 5年希望者) 79名参加。
- ・11月 神戸大学文学部(心理学)連携授業(1~5年生希望者) 60名参加。
- ・11月 科学技術振興機構等「サイエンスアゴラ in KOBE~科学・技術って誰のもの」1年生から5年生44名参加。5年生1名パネリストとして登壇。
- ・2月 神戸大学発達科学部 NGO「PEPUP」学生代表 小畑美優子氏らによる「国際協力講話」フェアトレードワークショップを本校「ESD Food プロジェクト」の取組の一環として本校で開催。1~5年47名参加。
- ・3月 神戸大学農学部との連携講座(5年生10名参加)

#### <成果の普及>

- ・課題研究優秀者発表会を大学講堂・施設で行うと共に, 文化祭及び授業研究会・SGH第5年次報告会においてポスター発表, 口頭発表を行うことにより保護者, 地域の学校関係者, 大学関係者等の参加者を拡大した。また, 大学広報誌, SNS ニュースなどを通して学内外に周知した。
- ・附属中等のSGH年次報告会, 授業研究会での成果の普及活動に大学教員が協力した。
- ・グローバルキャリア人意識調査について, 各種報告書に記載配布したほか, 全国国立附属学校連合会高等学校部会, 他校研究会(広島県立福山誠之館高等学校), 教育関係セミナー(大阪大学, 日本教育新聞)等で発表した。

#### <成果と課題>

- ・神戸大学と附属中等教育学校の一体的運営によるSGH事業の推進は, 上記①~③の各分野で順調に進展した。

6 研究開発の実績

6-1 課題研究

(1) 実施日程 ●は新型コロナウイルス感染症対応策による臨時休業措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①課題研究の実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
②独自科目の設置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●
③科目領域への再編					○				○			●
④教科, 新教育目標の策定		○			○			○	○	○	○	●
⑤グローバルフォーラムの運営	○	○	○	○							○	

(2) 実績の説明

①課題研究の実施

Kobe ポート・インテリジェンス・プロジェクト(以下「KP」:「総合的な学習の時間」)を利用し, 全体テーマ『神戸から発信する「地球の安全保障」への提言』のもとに, 次の4研究領域を設けて取組んだ。

- I 震災・復興とリスクマネジメント      II 国際都市「神戸」と世界の文化  
 III 提言: 国際紛争・対立から平和・協力へ      IV グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

今年度, 教員の推進体制では論文の評価ルーブリックの整備がさらに進んだ。当該生徒全員が論文を提出した。ただし, 3月13日に予定していた5年生の中間報告会(ポスター発表)は新型コロナウイルス対応に係る臨時休業のため実施できなかった。

<課題研究 I > 4年(8回生)対象 113名対象

4月 共通学習: ガイダンス, 大学図書館オリエンテーション, 先行研究調査

5月 テーマ相談会

共通講義「講座別課題研究に向けて」神戸大学大学院人間発達環境学研究科 林創准教授 ※8講座編成。

6~8月 講座別課題研究, 研究計画に基づく調査・実験

共通講義「情報収集と分析—統計的視点より—」神戸大学大学院人間発達環境学研究科 林創准教授

9~12月 調査・実験, 論文構想, 発表準備, 論文執筆

共通講義「プレゼンテーション力」本校教員  
 講座内中間発表, 4KP 全体発表会,

1月 優秀者発表会(大学講堂)(林創准教授講評), 8,000字論文提出

2月 共通講義「卒業研究テーマ設定」神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンター 石川慎一郎教授

3月 課題研究へ向けての概要説明, 5KPのポスターセッション見学→中止

<課題研究 II > 5年(7回生)対象 136名対象

4~5月 ガイダンス・テーマ相談会: 講座内テーマ設定 講座担当決定 4研究領域 19講座編成  
 共通講義「テーマ設定」石川慎一郎教授

6~7月 共通講義「アンケート・統計手法」林創准教授, 6年優秀者発表会見学

9~12月 夏休みの成果発表, 講座内での論文指導, 論文書式, 評価の観点等の提示

1~2月 共通講義: 「論文作成に向けて」本校教員 講座内中間報告

一次論文提出(18,000字)

2~3月 ポスター作成・発表準備, 3/13 課題研究中間発表会→中止

### <課題研究Ⅲ> 6年(6回生) 160名対象

4～6月 全体ガイダンス：第一次論文の加筆修正・日本語要約作成 最終論文提出

7月 共通講義「プレゼンテーションの方法」(本校教員)最終発表会  
課題研究優秀者発表会(大学講堂)(石川教授・林准教授講評)

9～11月 英文要旨執筆指導

2月 優秀論文集発行

### ②独自科目について

「ESD」「国際理解」は、課題研究を支える科目として3・4年で継続実施した。社会科との関連性が高いことから、社会科系分野・科目を横断的に編成し「目標」を位置付けている。

#### <3年：ESD> 対象131名

社会科の枠内で実施。社会科系各分野を横断的に扱うと共に、理科・情報・栄養教諭が協力している。今年度は、「共創 co-creation」を基盤とした授業を実践した。

#### <4年：国際理解> 対象113名

「現代社会」1単位分を充当。中学社会及びESD等の履修内容を踏まえ、先進国と途上国の関係性に中に位置付けつつ、模擬国連等の形態を意識した「主題学習」として深い学びを組織した。

### ③横断的学習

教科の枠組みを残しながら、「対話表現」「数理探究」「生活環境」「地球市民」の4教科領域を編成し、協力関係を強化している。「生活環境」では保健体育科教員、養護教諭、栄養教諭が大学、保護者と連携し、生徒のよりよい生活習慣を目指した調査・研究を進めた。

### ④教科新教育目標

次期学習指導要領を踏まえながら、教科共通の能力として、「知識・理解」「技能」「思考力」「課題探究力」「グローバルキャリア力(国際人的素養)」の5観点(指導要録等公的評価には4観点に読み換え)を教科共通の学力要素として「教科新教育目標」を整備し、2月の授業研究会にて授業公開、実践発表を行った。

### ⑤グローバルフォーラムの実施

本校SGH集大成のイベントとして神戸大学百年記念館(六甲ホール)にて開催。シアトルICS生徒24名、ベトナムFLSS生徒4名を受け入れ、本校滞在中に授業体験や文化交流も行うと共に国際的課題についてグループでディスカッションし、提言をプレゼンテーションにまとめて発表した。

### <成果の普及>

- ・課題研究発表会(Ⅱのポスター発表は中止)を行って、研究成果を保護者、下級生(624名)及び他校生徒(一部生徒：全国高校生フォーラム、他校課題研究発表会、大学学生会議、「国際問題を考える日」等)(約500名)に普及した。優秀作品については、優秀者論文集を発行し下級生の論文執筆に役立てた。
- ・校内でのポスター展示(約70点)を充実させた。校外でのSGH発表会、各種学会等で延べ18名が発表を行った。
- ・課題研究及び「ESD」「国際理解」「海外研究」については、SGH年次報告会及び授業研究会で公開し、延べ74名の参観者を得た。
- ・書籍の刊行・普及  
昨年度刊行した『探究の力を育む課題研究—中等教育における新しい学びの実践—』(学事出版：大学教員2名、本校教員7名うち2名は元教員)を用いた教員研修を行うと共に、普及に努めた結果、10月に第2刷が公刊された。

### <成果と課題>

- ・課題研究では指導体制や指導方法・評価方法の改善が進んだ。より詳細なルーブリックの改訂も行った。優秀論文選考方法については、さらに検討する必要がある。
- ・課題研究と教科学習の連関した取り組みが進んだ。課題研究領域やESDをテーマに授業を行った教員が79

%に達し、教員の74%が、課題研究と教科学習の間で相乗効果があったと評価している。また、次期学習指導要領を踏まえつつ、全教科で「課題探究力」の育成を観点に掲げ、「主体的・対話的で深い」学習を幅広く展開した。

・海外研修についても事前事後学習の進展があったが、課題研究との関係性をさらに深める必要がある。

## 6-2 グローバル・アクション・プログラム

(1) 実施日程 ●は新型コロナウイルス感染症対応策による臨時休業措置で実施できず。

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
*事前事後学習を含まず												
①リーダーセミナー等の実施			○	○			○	○			○	●
②課題認識育成プログラム			○		○		○	○	○			●
③国内課題研究プログラム		○		○	○	○	○	○	○	○	○	●
④海外課題研究プログラム			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑤グローバル体験評価制度							○				○	●
⑥グローバル体験の普及		○	○	○		○		○	○		○	●

(2) 実績の説明

「グローバル・アクション・プログラム」(GAP)は、その性格から次の4種類に分類している。各事業の到達点を明確にすることで、グローバルキャリア力を段階的に養成しようとの考えからである。課題研究とも関連性が高く、目標の高いCのGAPを「課題研究アクション・プログラム」と位置付けている。

A グローバルな課題認識に教養面からアプローチするプログラム

B 国際交流体験、語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム

C 明確な課題認識を持った上で、認識を深化させるプログラム＝課題研究アクション・プログラム

C1 課題研究アクション・プログラム：国内 C2 課題研究アクション・プログラム：海外

### ①A. 教養面からアプローチするプログラム

＜神戸大学講座＞ 延 156 名参加。

・4月・3月 神戸大学農学部との連携講座 {6年生 9名参加, 5年生 10名参加}

・6～7月 神戸大学連続リレー講座(6回:4・5年希望者)\*前述 79名参加。

・11月 神戸大学第15回連携授業(文学部心理学)神戸大学文学部 准教授 野口泰基氏「心理学のウソ・ホント」(全学年希望者) 58名参加。

＜グローバルリーダーセミナー＞ 計4回延 180名参加。

・7月 神戸大学大学院経済学研究科 吉井昌彦教授「EUの移民・難民問題とポピュリズムの台頭」国際文化学研究科坂井一成教授「B Brexit後の日英・EU関係」(兼2019年度神戸大学ジャンモネCOE主催「高校生向けミニシンポジウム」)(全学年希望者) 41名参加。

・7月 独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構金属資源開発本部 特命参与 辻本崇史氏「金属資源講話」(全学年希望者) 48名参加。

・11月 国立研究開発法人科学技術振興機構科学コミュニケーションセンター・神戸医療産業都市・京コンピュータ一般公開特別企画「サイエンスアゴラ in KOBE～科学・技術って誰のもの?～」(全学年希望者) 44名参加。 ※本校5年生パネリスト登壇

・2月 神戸大学 NGOPEPUP 学生代表神戸大学国際人間科学部3回生 小畑英優子氏「国際協力講話」※フェアトレードワークショップ(2月)(全学年希望者) 47名参加。

### ②B. 国際交流体験、語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム (計 224 名参加)

＜海外研修＞

- ・7月 カナダ語学研修(3・4年) 30名参加。
- ・9～10月 シドニー修学旅行(5年全員) 135名参加。

#### <国内研修>

- ・8月 PDA 高校生即興型英語ディベート合宿大会(4,5年) 10名参加。
- ・3月 PDA 中学生即興型英語ディベート全国大会(オンライン会議)(2,3年) 4名参加。
- ・10月 ハノイ国家大外語大附属高受入れ(4・5年) 10名参加。
- ・11～12月 神戸在留中高生交流(カナディアン・アカデミー)(3,4年) 24名参加。
- ・12月 神戸市国際協力交流センター主催。「KOBE COMMUNITY FORUM」(1～4年) 11名参加。

#### ③C1. 国内課題研究プログラム (計166名参加)

- ・7～8月 オックスブリッジ英語サマーキャンプ(3～5年) 24名参加。
- ・通年 ユネスコ関連事業「ESD Food プロジェクト」(フードバンク関西, コープこうべ, 神戸大学と連携)(1～5年) 53名参加。
- ・通年 アートマイル国際協働学習プロジェクト(交流相手校: サウジアラビア Al Hussan International School Al Knobar)(2～4年) 27名参加。
- ・通年 「震災・復興・減災宮城交流プログラム(DR3)」(宮城教育大学, 宮城県多賀城高等学校, 滋賀県立守山高等学校, 尼崎市立武庫東中学校, NEC ネットエスアイと連携)(4～5年) 14名参加。
- ・8月 臨海実習(神戸大学内海域環境教育センター(KURCIS)と連携)(3～5年) 15名参加。
- ・8月 数学・理科甲子園ジュニア兵庫県大会(兵庫県教委主催)(2年) 3名参加。
- ・8月 近畿・北陸地域ASPnet校(小・中・高)による日・中ESD/SDGs学びあい交流会(1, 2, 5年) 4名参加。
- ・兵庫県中学生水の作文コンクール(1年) 3名参加。{1名「優秀賞」(第2位)入選}
- ・ESD実践研究集会(ESD推進ネットひょうご神戸)分科会で「ESD Food プロジェクト」の取組を発表(3年) 3名参加。
- ・11月 全日本高校模擬国連大会 議題: 「死刑モラトリアム」ノルウェー大使を担当(4年) 2名参加。
- ・12月 全国高校生フォーラム(5年) 1名参加。  
(※「アジア高校生架け橋プロジェクト」のタイ留学生 1名参加。)
- ・12月 WWL等課題研究交流発表会: 神戸市立葺合高校(4・5年) 4名参加。
- ・1月 サイエンスフェア in 兵庫(兵庫「咲いてく」事業推進委員会)(5年) 1名参加。
- ・2月 DR3 神戸・宮城交流 宮城県被災地視察, 大川小学校訪問(4～5年) 7名参加。
- ・2月 高校生国際問題を考える日(兵庫県教委, 大阪大学)(5年) 5名参加)

#### ④C2. 海外課題研究プログラム (計27名参加)

- ・7～8月 文科省派遣事業トビタテ! 留学 JAPAN 国際ボランティア(ベリーズ)(5年) 1名参加。
- ・7～8月 中高生マレーシアワークキャンプ(ボルネオ島植林活動)(5年) 1名参加。
- ・10月 米国シアトル研修 Global Science in Seattle: ICS(4年) 5名参加。
- ・11月 ベトナムハノイ研修: ハノイ国家外国語大学附属外国語英才高等学校交流(4年) 6名参加。
- ・12月 台湾 Asian Student Exchange Program (ASEP) 高雄師範大学附属高級中学と協働プレゼンテーション大会に出場(4, 5年) 5名参加。
- ・1月 カンボジア研修(JICA事務所及び関連施設, プノンペン日本人学校訪問)(4・5年) 5名参加。
- ・1～2月 英国ロンドン・ケンブリッジ研修(コンバートン・ビレッジ・カレッジ交流)(5年) 4名参加。

#### ⑤グローバル体験評価制度

- ・GAPの各プログラムへの参加度・達成度を評価するマイレージ制度(キロマイル単位で付与)を適用している。算定には, 各プログラムの目標設定度, 選考方法, テーマ・場所・日数等を考慮した。

### <成果の普及>

- ・全校集会(始業式・終業式等を含む)、文化祭、オープンスクール、GAP 報告会、学年集会、SGH 第5年次報告会等で報告した。
- ・SGH 年次報告会、ホームページや出版物(報告書、論文集、大学広報誌)等を通して、②③④については、学内外に広報した。

### <成果と課題>

GAP をはじめとするグローバル体験については、軌道に乗り、事前事後学習も充実し、英語による発表・対話活動も増加した。ただし、交流校の財政上の問題から予定していた受け入れが実施できなかったプログラムもある(英国 CVC 受け入れ)。また、本校においても SGH 終了後の交流校の受け入れ・派遣共に財政問題をどうするかが課題である。

## 6-3 高大一体による調査研究

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①グローバル意識の調査・分析									○	○	○	○
②SGH 事業評価												○
③各プログラムの調査・分析	○				○				○	○	○	○
④教員研修・自己評価	○	○		○		○	○	○		○	○	

### (2) 実績の説明

神戸大学の多面的な支援については、「(1)管理機関の取組・支援実績」のところで記した。ここでは「調査研究」を中心に略述する。ただし、新型コロナウイルス感染症対応策による休校措置で3月に予定していた生徒及び保護者対象のアンケート等が実施できないなど事態が起きており、SGH 指定5年間を振り返っての事業の評価・検証ができなかった。

#### ①グローバル意識の調査・分析

平成25年度より、石川慎一郎教授の助言を受け「グローバルキャリア人」に関する意識調査を継続実施しており、本年度も12月に行った。

#### ②SGH 事業評価

- ・教員を対象にアンケートを実施。

#### ③各プログラムの調査・分析

- ・GAP については、事業ごとの統一報告書を作成し、事業評価を実施した。

#### ④教員研修・自己評価

- ・教員研修(新学習指導要領、アクティブ・ラーニング、SDGs、評価等)については、全体研修会を利用して、年10回実施した。

### <成果の普及>

- ・グローバル意識調査結果については、テキストマイニング方式を用いた調査方法自体が注目されており、各種報告書に記載配布したほか、全国国立附属学校連合会高等学校部会、他校研究会(広島県立福山誠之館高等学校)、教育関係セミナー(大阪大学、日本教育新聞)等で発表している。

### <成果と課題>

組織改革が機能し、SGH への教員の参加意識は高い。また、生徒の「グローバル意識調査」や SGH 事業評価を行うことで、SGH 事業の分析・検証・評価を行うことが可能になった。課題は、一部項目に関して、生徒・保護者への説明が不足していることである。

## 6-4 組織整備, 広報活動

### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①組織整備・運営	○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○
②広報活動		○	○	○	○	○		○	○	○	○	○
③予算執行			○	○		○	○	○	○	○	○	

### (2) 実績の説明

#### ①組織整備・運営

- ・学校の横断的組織(事務員参加, 教員組織である教科・分掌を越える)グローバル教育推進室を毎月定期開催した。)
- ・課題研究, 批判的思考力, 及びSDGsをテーマにした校内研究会を3回開催した。
- ・運営指導委員会を2回(9月・2月)開催した。

#### ②広報活動

- ・10月『探究の力を育む課題研究』(学事出版)が増刷された。
- ・8月 大阪大学及び日本教育新聞社・株式会社ナガセ主催のセミナーで本校教員が「探究」の指導に関する講演を行った。
- ・12月 本校の探究活動の取組が掲載された『高等学校「探究的な学習」実践カリキュラム・マネジメント』(稲井達也編著)が学事出版より公刊された。
- ・2月 SGH年次第5年次報告会及び授業研究会を開催し, 約350名の参加を得た。  
『SGH第5年次報告会当日資料』を刊行した。  
『SGH課題研究優秀論文集』を刊行した。
- ・3月 『SGH研究開発実施報告書(第5年次)』を刊行した。
- ・生徒の活躍の様子をホームページに掲載した。

#### ③予算執行

- ・ほぼ予定通り執行した。一部不足分については大学経費で執行した。

#### <成果と課題>

- ・全体に順調であるが, ホームページの更新及び英語版のホームページ作成等, 広報活動の改善が遅れている。より一層丁寧な広報活動が必要である。

## 7 平成31年度目標の進捗状況, 成果, 評価

平成31年度事業計画に基づく事業の「進捗状況, 成果, 評価」について, 以下に記載する。神戸大学の支援・協力を得ながら, 全体として順調に進行している。一方, 依然として活動成果の発信及び広報活動で不十分な点が見られる。SGH指定終了後も必要な改善を図りたい。

	事業	年度当初の課題	進捗状況, 成果, 評価(△肯定的▼課題有)
A	課題研究を核とする教科横断型体系	論文作成各段階(課題設定, 調査, 概括, 執筆, 発表)における目標設定の更なる改善を行うと共に, 評価基準についての教員意識の平準化を図る。	順調に進捗した。 △論文の評価ルーブリックの改善が図られた。 △評価基準についての教員間格差が, ある程度是正された。



的グロー バル人材 育成カリ キュラム の開発	A2 独自 科目設置	課題研究の研究領域と「ESD」「国際理解」の連関性をさらに深める。SDGsを意識しつつ主題学習を発展させる。	順調に実施した。 △SGH年次報告会の評価から独自科目内容の深化がみられる。また、「ESD」については、SGH指定終了後も教育課程に位置付けることが決定した。
	A3 科目 の領域へ の再編	新学習指導要領を踏まえた教科「新教育目標」を实践する。生徒の「主体的で対話的な深い学び」が実現するよう、SGH実践を梃に教科改革・授業改革を行う。	順調に進捗した。 △授業研究会等において、教科単位でSDGsを意識し、教科横断的実践が広がり、引き続き課題研究と教科学習の相乗効果がみられた。
	A4 Global Forum	神戸大学主催「Global Forum」を開催し、各交流校との交流実践を基に内容協議を行うと共に、フォーラムを成功させる。	順調に進捗した。 △4校との交流協定締結に基づく研修交流が充実し、フォーラムへの布石となった。 △シアトルICS生徒24名、ベトナムFLSS生徒4名を受け入れ、国際的課題についての提言をプレゼンテーションにまとめて発表することができた。
B 国内外で の圧倒的 なグロー バル・アク ション・プ ログラム (GAP)の 実施	B1 国内 グローバ ル体験	事業継続のため、GAP成果の普及機会を拡充する。マンパワーも考慮し、諸企画を整除すると共に、支援体制を講じる。	順調に進捗した。 △活動報告を継続的に行うことで、アートマイル、ESD Food プロジェクト、新規事業、ESD関連事業が継承・発展した。
	B2 海外 グローバ ル体験	事業継続のため、GAP成果の普及機会を拡充する。海外研修と課題研究との関連性をさらに深める。また海外受入れ事業との内容的関連を強化する。	ほぼ順調に進捗した。 △事前・事後学習を強化し、課題研究との関連性が深まるケースが増加した。 ▼海外受入れ事業との内容的関連の面では課題を残した。
	B3 グ ローバル マイレージ	生徒の「学びの履歴」総体の中に個々のプログラムを位置付け、それに応じて GAP マイレージの修正を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △「学びの履歴」との関係性を周知したことで、全体にマイレージ制度に対する生徒・保護者の理解が進んだ。
C 高大一体 による実 践を支え る確かな 調査研究 の推進	C1 アン ケート実 施・分析	グローバル意識調査と教科教育の連関について分析を進める。全体調査と GAP 等の個別調査結果を連関させる。	ほぼ順調に進捗した。 △統語分析ソフトの活用等、本校教員の調査分析技術が向上した。 ▼プログラムによっては、課題を残した。
	C2 総合 的生徒評 価システ ム	グローバルキャリア力と教科学力を組み合わせた評価法を広く実施する。高大接続研究に伴う検証・評価を実施し、「志」特別入試にデータを提供する。	ほぼ順調に進捗した。 △課題研究の評価ルーブリックを参考にした各教科におけるルーブリック作成が進捗した。 ▼高大接続研究に伴う検証・評価については、遅れがある。
	C3 教員 自己評価	教育プログラムのPDCAのため、教員自己評価を継続すると共に、教科における自己評価の改善を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △新学習指導要領研修及び教科目標づくり、公開授業等を通して、SGHへの教員自身の自己評価が高まった。 ▼一部教科、教員レベルで遅れがある。
	C4 教員 研修	新学習指導要領を踏まえ学校教育改革と連動させた教員研修を行	ほぼ順調に進捗した。 △新指導要領とSGHの関連についての研修を実

		う。また、大学教員の助言を得るため「研究アドバイザー制度」の拡張を図る。	施し、教員研修の改善を図った。 ▼英語科で実施している「研究アドバイザー制度」は拡張できなかった。
D ※前記課題を遂行できる実施体制	D1 グローバル教育推進室	室員数を縮小し運営の効率化を図ると共に、計画の早期決定と業務分担の合理化を図る。	順調に進捗した。 △実務の一体的運営が進展し、計画等の立案・周知が改善された。
	D2 広報活動	『探究の力を育む課題研究』を活用する。保護者への周知方法の改善、ホームページ(和・英版)等の迅速な更新及び内容の充実を図る。	ほぼ順調に進捗した。 △『探究の力を育む課題研究』を活用し、円滑な実践に寄与した。 ▼活動報告についてホームページへの掲載が一部のプログラムにとどまった。
	D3 予算執行	予算が縮減する中、重点配分と事業の自立についての検討を継続する。円滑な執行のため、事務室との協議を定例化する。	ほぼ順調に進捗した。 △SGH終了後を想定し、予算の減少に対応した支援体制の見直しを行った。 ▼SGH終了後の運営と予算確保についての見直しについては課題を残した。

## 8 5年間の研究開発を終えて

### (1) 教育課程の研究開発の状況について

カリキュラム開発を次の計画通り実施することで、グローバルキャリア力育成に貢献した。

- ①課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(Kobe プロジェクト=総合的な学習の時間を活用)を設定・実施。
- ②課題研究を支える教科横断的な特設科目「ESD」「国際理解」を設定・実施。
- ③特別教育を活用したグローバル・アクション・プログラム(GAP)の実践

\*なお、教育課程の研究開発と関連した教科教育目標の改訂及び共創的対話を重視した単元展開、授業改革については(5)に記す。

#### ① 課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの実施

##### <実施概要>

- ・Kobeプロジェクト(総合的な学習の時間)の枠組みを利用し、課題研究Ⅰ(4年)、課題研究Ⅱ(5年)、課題研究Ⅲ(6年)を置き、後期課程生全員を対象に実施した。「地球の安全保障」を全体テーマとし、次の4研究領域を置き、全生徒がさらに限定したテーマを設定して、個人研究論文(課題研究Ⅰ:8,000字以上、課題研究Ⅱ・Ⅲ:18,000字以上)を作成した。

- ①震災・復興とリスク・マネジメント
- ②国際都市「神戸」と世界の文化
- ③提言:国際紛争・対立から平和・協力へ
- ④グローバルサイエンスと拠点都市「神戸」

- ・リサーチリテラシーに関する「中高6年一貫ルーブリック」を作成し、課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲごとに、「学習目標」を設定した上で、次の内容を明確にしつつ臨んだ。

「育てたい力」、「テキスト」、「提出物」、「評価対象」、「評価方法」

特に、「育てたい力」については、探究活動の諸過程を踏まえ「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」、及び4つの力のそれぞれに関わる「考える力」に分節化して、目標を設定した。

##### <成果と評価>

- ・学校が設定した「課題研究」の内容および対象人数は適切であった。
- ・生徒全員が「課題研究論文」(4年習作8,000字以上、5年一次論文・6年最終論文(18,000字以上+英文要約)を提出した。運営指導委員会でも年々論文のレベルが向上していることが確認されており、全体として妥当

性が伺える。

- ・「課題研究」に対する生徒の自己評価は、年次進行につれて全体として上昇している。なかでも「テーマの設定と必要な修正（絞り込み）」「根拠となるデータの入手方法」「論文の構成や書式、引用等に関する遵守事項」「調査内容を適切に発表する多様な方法」等の論文のスキルに関する項目で顕著な改善が図られた。（根拠資料A）
- ・4回生（平成29年度卒業生）を対象にしたアンケート結果から、多くの生徒が「意欲的に取り組めた」「知的好奇心が刺激された」「知識が深まり、あるいは能力が高まった」と感じており、「研究とは何かを知ることができた」「研究の方法について習得できた」と感じた生徒も多かったことがわかる。さらに、「今後の人生に役立つと思う」と感じた生徒も多く、総合的に判断して、生徒たちにとって課題研究が意義のあるものであったと考えられる。
- ・論文については、毎年、課題研究「優秀者論文集」を発行した。「優秀論文集」は、課題研究発表会やポスター発表と共に、後輩の研究の手助けとなった。また、優れた研究は、「高校生科学技術チャレンジ」をはじめ各種学会・報告会等でも発表し、高い評価を受けている。
- ・一方、「満足のいく研究ができた」「満足のいく論文が書けた」の評価は低い。学年が進行するにつれて、研究自体は進化しているのだが、研究への「問い」が深まるにつれて自分の至らなさを自覚する傾向があり、「理想」と「現実」の間で、メタ認知が働いた結果とも受け取れる。質問項目や表記の再検討も含め吟味する必要がある。
- ・本校が進めた課題研究は、SGH年次報告会で毎年授業を公開している。その成果は昨年度末に公刊した『探究の力を育む課題研究』（学事出版：2019年3月）に結実している。同書の販売は好調で、半年（2020年10月）で2刷に入っていることから、課題研究の普及・推進に貢献していると思われる。

<根拠資料>

「SGH研究開発実施報告書（第2年次（平成28年度）～第4年次（平成30年度）」SGH事業アンケート結果  
林創・神戸大学附属中等教育学校（2019）『探究の力を育む課題研究』（学事出版）  
第9章 課題研究の効果の検証

## ②特設科目「ESD」「国際理解」の設置

<実施概要>

- ・特設科目「ESD」（教育課程上は「中学社会科公民的分野」の一部）及び「国際理解」（高校公民科学校設定科目）は、「地球の安全保障」をテーマとする「課題研究」の準備教育として位置付けた。3年「ESD」は、社会科を中心に家庭、情報、英語、栄養教諭等の協力を得て教科横断的に実施し、4年「国際理解」は、模擬国連などの授業形態を取り入れて「地球の安全保障」に直結する課題について取り組んだ。
- ・特設科目は、教科横断型な学びを推進し、「災害復興」、「水」、「食糧」、「気候変動」、「生物多様性」「ジェンダー」、「AI」、「教育」、「平和」などの教科の枠を越えた授業づくりも生み出し、学校の教育課程改革に寄与した。
- ・なお、本校はユネスコスクールであり、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）を、「特設科目」を含む全教育分野で実施している。

<成果と評価>

- ・特設科目「ESD」「国際理解」を設定したことは、適切であった。
- ・「地球的課題」を考える上で、有効な特設科目となったことは、生徒の評価やSGH年次報告会における参加者評価からも検証できる。
- ・同授業が起点となって、SDGs目標に通じる「水」、「生物多様性」、「フェアトレード」、「フードロス」、「ジェンダー平等」、「震災とリスクマネジメント」などの教科横断的な実践が生み出された。同時に、課題研究における生徒のテーマ設定にも影響を与えた。
- ・「ESD」「国際理解」の実践は、SGH年次報告会で授業を公開したほか、関連学会でも報告（生徒による発

表を含む)した。こうした特設科目「ESD」「国際理解」及び「課題研究」を含む、一連の取り組みが評価され、本校は「第8回ESD大賞高等学校賞」(平成28年度、日本持続発展教育推進フォーラム)を受賞した。

#### <根拠資料>

- ・「SGH研究開発実施報告書(第2年次(平成28年度)～第4年次(平成30年度))」SGH事業アンケート結果(「ESD」,「国際理解」に関する評価結果)
- ・SGH研究開発実施報告書(第1年次(平成27年度)～第5年次(平成31年度))生徒の活動紹介
- ・NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム『第8回ESD大賞受賞校実践集』  
[http://www.jp-esd.org/img/2017\\_ESD-jissen\\_8\\_web.pdf](http://www.jp-esd.org/img/2017_ESD-jissen_8_web.pdf)

### ③グローバル・アクション・プログラム(GAP)

#### <実施概要>

- ・英語を使用言語とするプログラムも含めた生徒のアクティビティを、GAPとして多面的に展開した。アクティビティと「問い」を結びつけることで、課題研究に貢献した例も多く生まれた。なお、グローバル・アクション・プログラム(GAP)は、海外10事業,国内38事業を当初計画を越えて実施した。
- ・GAPは、カリキュラム上「特別活動」の位置づけで実施した。本校が以前から実施してきた国内外の体験プログラムを、SGH指定を機にGAPとして一本化することで、生徒のグローバル体験を飛躍的に向上させることとなった。
- ・その際、各種研修を課題研究と結びつけることは重要だが、グローバルキャリア力を段階的に養成する必要があると考え、GAPに次のA～Cのレベルを設定した。また、Cプログラムを課題研究と直結させて実施し、SGH経費による支援対象とした。

A: グローバルな課題認識に教養面からアプローチするプログラム

B: 国際交流体験、語学研修等を通して課題認識を育成するプログラム

C: 明確な課題認識を持った上で研修に参加、認識を深化させるプログラム

C1: 国内 震災・復興・減災(DR3)プログラム、神戸・宮城交流、Global Forum

全日本高校模擬国連大会、EU東京研修(平成31年度は中止)、ジオパーク(山陰)研修(平成31年度は中止)、アートマイル国際協働学習プロジェクトなど

C2: 海外 米国シアトル研修、ベトナムハノイ研修、台湾ASEP、カンボジア研修、英国研修など

#### <成果と評価>

- ・「グローバル・アクション・プログラム(GAP)」は、生徒の体験を豊かにすると共に、課題研究を支える効果的な取組となった。
- ・最終年度に実施した神戸大学主催の国際研修プログラム「Global Forum」を準備する中で、シアトルICS、ハノイFLSS、高雄師範大附属高級中学、ケンブリッジCVCの4校と交流協定を締結し、現地研修等を行って、参加生徒の課題研究につなげた。
- ・GAPへの参加を基礎に生徒が各地で行った事業が高く評価されている。

例)「水」をテーマにフランスの学校と共同制作した国際交流壁画がパリのユネスコ本部で展示(アートマイル事業)。英国のEU離脱について課題研究:ディスカッション部門(移民受入れ問題)で最優秀賞(「SGH甲子園」2017)、研究成果プレゼンテーション部門(日本語)で最優秀賞(「SGH甲子園」2019)受賞。

#### <根拠資料>

- ・「SGH研究開発実施報告書(第1年次(平成27年度)～第5年次(平成31年度))」  
グローバル・アクション・プログラム・生徒の活動紹介
- ・SGH甲子園2017ホームページ <http://tankyu-koshien.jp/archive/2017/today.html>
- ・SGH甲子園2019ホームページ <http://tankyu-koshien.jp/archive/2019/today.html>

#### (2) 高大接続の状況について

### <実施概要>

- ・SGH 指定を機に、「附属中等教育学校を活用した高大接続研究実施委員会」のもと、高大接続研究制度を立ち上げ、第2・3年次（平成29.30年度）の2年間、5学部の参加を得て、高大接続研究入試を実施した。なお、同接続研究は、平成31年度神戸大学「志」入試の「試行」と位置付けて実施した。
- ・高大接続研究入試では、本校からの推薦者（18名）を対象に当該学部でグローバル・アクション・プログラム（大学GAP）を実施し、高大接続の観点から（報告、論文、実験・観察）指導等を行った。大学GAPへの参加状況をもとに第2次推薦者8名を決定し、神戸大学アドミッションセンターによる高大接続研究入試を実施して内定者を決定した。
- ・その際、「社会基礎学連続リレー講座」（6・7月 計15講座）の単位認定を検討したが、大学の単位ではなく、本校の成績評価にとどめることとなった。
- ・第4年次（平成31年度）からは、一般生徒を対象とした神戸大学「志」入試に移行した。

### <成果と課題>

- ・接続「研究」入試は、一部「志」入試に継承されたが当初の構想は未完成に終わった。
- ・高大接続研究入試は、第2・3年次の2年間で、4学部14名（国際人間8、農5、海事科学1）が進学した。その際、希望者は20名以上であった。本校の課題研究やGAP体験と大学GAPをつなぐ接続研究入試は、生徒のモチベーションを上げると共に、接続入試の在り方を考える上で、大きな意味をもった。
- ・しかし「志」入試に移行したことから、高大接続研究入試は大学GAPやアドミッションセンターによる入試など、入試形態の面で神戸大学「志」入試に一定の貢献を果たしたが、本校生の「志」入試に対するモチベーションは低下し、応募者・進学者は減少した。

## (3) 生徒の変化について

### <実施概要>

- ①神戸大学との一体型調査研究を実現し、生徒のグローバルキャリア意識の変化を可視化するため、学校独自の「グローバル意識調査」（5観点24項目）の継続的实施と結果分析システムの開発および検証研究を行った。
- ②生徒によるSGH事業評価アンケート（42項目：学年によって異なる）を、第2年次より継続して実施した。ただし、第5年次は、新型コロナウイルス感染症対応の臨時休校で実施することができなかった。

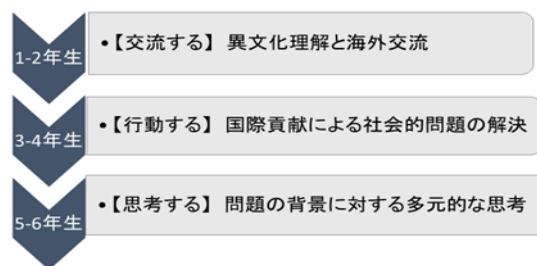
### <成果と評価>

#### ①グローバル意識調査の分析より

- ・SGH 指定前に比べ生徒のグローバルキャリア意識の変容があったことが、「グローバル意識調査」とその分析によって検証できた。
- ・平成26年度から28年度の「グローバルキャリア力」に関連する5観点24項目への「重要度」「達成度」の生徒回答結果から、総体として生徒のグローバル意識は大きく伸長している。
- ・SGH 指定2年間、対象となった3・4回生の意識の変容についても検証したところ、多面的な思考力が顕著に伸びていることが明らかとなった。個々の要素では課題が明らかになった面もあるが、全行的には大きな成果が挙げられていると考えられる。
- ・調査開始当初は「知識力」に関して、「科学知識」のみが重要度、達成度共に他の知識（日本知識、世界知識）に比べて低いことが確認された。SGH 事業は、文系能力、理系能力共に備えた世界でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目標としているが、当初の生徒たちは、日本や世界に関する知識は重要であると考え、またそれなりに達成感を感じているが、科学知識については重要であるという意識はそれほど持っていないようであった。この理系知識の涵養を目指す事業の開発が課題と考えられていたが、5年間で科学知識については、重要度、達成度共に伸びた。平成27年度から外部入学試験を導入し、理系教科が得意な生徒が増加していることも要因の1つであるが、サイエンス・リテラシー育成に注力した理科の授業改革や、生徒個人の課題研究における実験や観察といったリサーチ活動が奏功したと考え

られる。また、「基盤能力」の「論理的思考力」，「多面的思考力」，「課題対応力」の「課題解決力」，「課題発見力」，「探究力」，「想像力」も重要度，達成度共に伸び幅が比較的大きい。これも，課題研究に取り組んだ結果，これらの能力が重量であると認識できるようになり，課題研究を指導する際に，生徒が自律して創造的に課題を解決していくことができる指導の在り方についても検討し，実践した成果であると推察される。「経験力」の「国内フィールドワーク体験」について，重要度の伸び幅は低いが，前期課程の生徒も参加可能な国内のグローバル・アクション・プログラムを増やした効果として，達成度の伸び幅は大きくなっている。「国内異文化体験」，「外国の友人」，「世界貢献」については，重要度，達成度共に伸び幅が減少している。「国内異文化体験」，「外国の友人」については，海外交流協定校研修生や神戸大学の留学生，カナディアン・アカデミイの生徒を受け入れた際に，短時間の交流であっても，異文化を実感することができるようにプログラムの改善を図ることが大切である。英語だけでなく，様々な科目の授業でも，積極的に交流できる機会を作りたい。「世界貢献」についてであるが，質問項目を「世界」ではなく，「社会」貢献とすべきであったとも思うが，「『世界貢献』とは，外国に行ってボランティア活動をするのみを指すのではなく，日本にいながらでも自分たちでできることを考えたり，世界の課題について調べたことを発信し，他の人たちに理解してもらうのも『世界貢献』である」との認識も持たせたい。また，そのような意識を醸成するような教材やプログラムを開発することが必要である。第5年次（令和2年）2月に実施した神戸大学発達科学部の学生団体代表者によるグローバルリーダーセミナー（「国際協力講話：フェアトレードワークショップ」）などもそのモデルとなる一例であろう。

- 自由記述(100字程度)回答を基に，頻出頻度の高い単語を抽出・分析するテキストマイニング方式によって，グローバルキャリア意識の変容が明らかになった。
- 詳細は「SGH 研究開発実施報告書」H27・28に譲るが，分析によると，本校生徒の意識は1・2年では「文化的な海外交流」に，3・4年では「国際貢献」に，5・6年では「多元的思考」と深く関連していることから，本校生徒の発達過程と，次の変容モデルが明らかになった（右図）。
- 調査では，27年度と28年度の間にも変容がみられた。27年度調査では生徒の意識の変容が，1年→2・3年→4・5→6年の「→」間にみられたものが，28年度では1・2年→3・4年→5.6年の間に変容した。
- SGHの各事業が定着すると共に，前期課程生にもプログラムを増やしたことで，生徒のグローバル意識が早い段階から育成されたと推察できる。
- 指定後2年経過した5・6年生を分析することで，1年目と2年目の意識に顕著な変化がみられた。SGH事業を継続することで，グローバルキャリア人にとって極めて重要な多元的思考が深まったことが確認できる。
- 5年次（最終年度）では，SGH事業開始後から終了年度まで5年間本校に在籍していた6回生（現6年生）と7回生（現5年生）296名の回答を対象に出現頻度数上位20位の形態素を抽出して1年目と5年目を比較したところ，やはり，低学年では「外国」や「交流」，「英語」といった「グローバルキャリア人とは英語を用いて文化交流をする人」と特徴づける言葉が多く出現しているが，高学年になるにしたがって，「解決」，「理解」，「行動」，「活躍」，「視野」，「思考」，「視点」といった内面的な行動を表す言葉は頻出していることがわかった。



## ②SGH実践（グローバル体験学習と探究学習）と教科の学力との連関

本校のSGH実践のグローバル体験学習（本校のGAP）と探究活動（課題研究）が生徒の教科学力とどのように関係しているかについても調査した。グローバル体験学習と探究学習への参加度（GAPマイレージポイントと論文評価）を説明変数，生徒の教科学力（評定と模試偏差値及び英語技能テストのスコア）

を目的変数として分析した結果、態度や意欲を含めた「広義の学力：を示す評定と「狭義の学力（知識・能力）」を測る模試成績の両方に一定の効果があることがわかった。ただし、教科学力への寄与は必ずしも直接的、即時ではない。5年間でグローバル人材を育成するというSGHの構想は壮大なものである。今後、追跡調査を継続し、生徒への個別インタビューなども合わせて行うことにより、本事業実践で得られた知見の妥当性の向上を図ると共に、さらなる教育プログラムの改善につなげていきたい。

#### ③生徒SGH事業評価（指定後4年間）の分析より

- ・5年次最終年度（平成31年度）は3月に予定していた生徒対象のアンケートが新型コロナウイルス感染症対応のための臨時休校で実施ができなかった。調査実施期間の4年間を通して、前期課程ではすべてのアンケート項目で0.1～0.4の上昇がみられ、特に課題研究やESDに対する評価が上昇した。ただし、「教科で学んだことが、KP学習に役立った」、「KP学習で学んだことが、教科学習に役立った」についてはあまり変化が見られなかった。
- ・後期課程では、多くの項目で0.1～0.3の上昇がみられた。課題研究やGAPに対する評価も上昇した。ただし、前期課程と同様に、「教科で学んだことが、KP学習に役立った」「KP学習で学んだことが、教科学習に役立った。」については変化が見られなかった。また、将来「国際的な大学・学部に進学したい」、「海外に留学したい」、「国際的に活動する仕事につきたい」の評価については、0.1-0.2の低下が見られた。
- ・全体としてSGH事業は、生徒のグローバルキャリア意識の深化に貢献した。ただし、将来の国際的な行動についての意欲は停滞・低下しているように見える。現実が見えてくる中で慎重に考えているのか、日本の社会状況（内向き志向）の反映か、質問表記の問題か、更なる検討が必要である。

#### ④生徒の進路について

- ・課題研究を利用した国公立大学や難関私立大学のAO入試・推薦入試の合格者が増加した。。SGU等への合格者も5年間で483名に上った。また、少数ではあるが、海外（米国）大学へ進学する生徒も出てきた（本校HP参照）。

#### <根拠資料>

神戸大学附属中等教育学校ホームページ

<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/kuss-top/index.html>

「SGH研究開発実施報告書（第1年次（平成27年度）～第5年次（平成31年度）」

※生徒SGH事業評価アンケート結果については、上記報告書第2年次（平成28年度）～第4年次（平成30年度）を参照。

林創・神戸大学附属中等教育学校（編著）（2019）『探究の力を育む課題研究』（学事出版）第8章 課題研究の成果と大学入試・大学での学びのつながり

#### （4）教師の変化について

##### <実施概要>

- ・神戸大学との一体的運営のもと、SGH推進のためグローバル教育推進室を置き、4部会（課題研究推進、評価・検証、国際交流推進、英語教育高度化）を編成して、全教員が参加する仕組みを作った。
- ・大学教員等専門家を講師として招き、指導方法、教材開発、評価方法に関する様々な教員研修を行った（平成31年度は8回実施）。
- ・教師によるSGH事業評価アンケートを、第2年次より継続して実施した。

##### <成果と評価>

- ・課題研究の推進には、大学教員との連携のもとほぼ全教員が参加した。評価・検証は、大学の協力を得て、テキストマイニングの手法などが広がり、意識調査や授業分析などの質的向上が見られた。国際交流推進は英語科以外の教員も関わると共に、英語教育高度化事業は、英語科教員中心に進んだ。

- ・教員のSGH事業への参加度は増え、教材の充実、各種スキルアップが図られたが、グローバル教育推進室の中心メンバーへの負荷は解消されなかった。
- ・教員全体としては、実施4年間でSGH評価にあまり意識の変動はなかった。上昇(0.2-0.3)が見られるのは「SGH課題研究(卒業研究やKP)を効果的に推進するための教材開発が進んでいる」、「SGHの各取組は、課題解決に向けての主体的・協働的な学びになっている」、「SGHの影響もあって、教科の授業改善が図られている」の3項目である。
- ・下降(0.2)が見られるのは次の2項目である。「SGH事業は、研究計画や具体的目標値の達成に向けて、順調に進んでいる」、「地域(神戸)や中等教育学校の特色を生かした取り組みが行われている」。
- ・SGHアソシエイトの1年間の準備の上でスタートしたことから、当初からある程度教員の意識は高かったと考えられる。課題研究の推進や主体的・協働的な学び、授業改善に対する評価が高まる一方で、「研究計画や具体的目標値の達成に向けて、順調に進んでいる」が下がっているのは、教員の取組に対して文科省の中間評価が低かった(5段階評価の3番目)ことが影響しているかもしれない。

#### <根拠資料>

- ・「SGH研究開発実施報告書(第1年次(平成27年度)～第4年次(平成30年度))」SGH事業評価アンケート結果

### (5) 学校における他の要素の変化について(授業、保護者等)

#### ①教科教育目標の改訂及び共創的対話を重視した単元展開、授業改革。

##### <実施概要>

- ・「地球の安全保障」や「ESD」に関する教科横断的なテーマを、各教科においても取り上げることで、課題研究と連動した探究的授業を組織した。また、後期課程の教科学習においても、共創的対話型(主体的・対話的で深い学び)による授業改革が進んだ。
- ・授業改革の状況は、毎年「授業研究会」を開催し、「研究紀要」(本冊・別冊)を発行することでその成果を発信した。また、広島県立福山誠之館高等学校との間で研究協力協定を結び、ピアレビューを実施した。
- ・教科の枠を越えた4領域「対話表現」、「数理探究」、「生活環境」、「地球市民」を設定し汎用的能力を意識した教科教育目標や公開授業案等の相互検討を行った。
- ・教科学力評価と、グローバルキャリア力評価を統合した総合的生徒評価を実施し、必要な改善を図った。

##### <成果と評価>

- ・「地球の安全保障」や「ESD」に関する教科横断的なテーマを単元として取り上げた教科は全教科に及んだ。70%の教員が同テーマの授業を担当し、その効果についての自己評価も高い。また、数学科は「統計」学習をはじめとして課題研究に寄与している。
- ・教科学習目標の変革を検討する中で、特に思考力と実践力をつなぐ「課題探究力」の重要性、実践力を意識した「グローバルキャリア力」の必要性が明らかとなった。また、現行学習指導要領の4観点に矛盾しない形で教科教育目標の枠組みを設定し、教科学習改革を進めた。
- ・前期課程では、旧附属住吉中以来の伝統である協同学習を活かした「主体的で対話的な学習」の形態が定着していたが、SGH指定を受けて後期課程においても、「主体的で対話的な学習」が広がった。この傾向は教員や生徒のアンケート結果からも読み取れる。
- ・教科の枠を越えた4領域(汎用的能力を意識した)教科教育目標や公開授業案等の相互検討を行った。「生活環境」領域では「ヘルスプロモーション部会」を設立し、教育実践研究を始めているが、教科領域による実践は、全体としてあまり進まなかった。

##### <根拠資料>

- ・「SGH研究開発実施報告書(第1年次(平成27年度)～第4年次(平成30年度))」SGH事業評価アンケート結果



- ・『神戸大学附属中等論集』第1巻～第4巻（本冊・別冊）

## ②保護者の意識

### <実施概要>

- ・保護者に対し、SGH 年次報告会でGAP プログラム（国内・海外事業）の活動報告を一部を公開したほか、文化祭やPTA 通信で報告するなど広報活動に努めた。
- ・保護者によるSGH 事業評価アンケート（19 項目）を、第2 年次より第4 年次まで継続して実施した（第5 年次は臨時休校のため分析可能な回答数を得られず）。

### <成果と評価>

- ・ほぼすべての項目で評価が上昇している。なかでも「課題研究（卒業研究）及びKP 学習が、SGH の主要な事業」「ユネスコスクールが推進するESD（持続可能な開発のための教育）」「海外の学校と交流校協定を結んでいること」への認知度が上昇（0.3-0.6）し、保護者のSGH への関心度が高まったことがわかる。
- ・将来、「子どもに国際的な大学・学部に進学してほしい」「子どもに海外留学をしてほしい」については、生徒と違って3.1 と高く、若干ではあるが上昇している。
- ・海外交流への期待は高いが、欧米への期待（61-64%）が高く、アジア圏への期待（22-36%）は低い傾向にあり、格差が顕著である。

### <根拠資料>

- ・「SGH 研究開発実施報告書（第1 年次（平成27 年度）～第4 年次（平成30 年度）」SGH 事業評価アンケート結果
- ・神戸大学附属中等教育学校 PTA 通信「うばら」第10 号, 12 号, 14 号, 16 号。

## (6) 課題や問題点について

### ①「課題研究」における教員の指導力格差について

- ・「課題研究」の評価について（論文評価ルーブリックの改訂）：相対評価を避け、達成度を測るために、各種評価項目を整備し基準を設けた。しかし、基準があっても担当教員間の主観が阻害要因となることもあり、公平で安定した評価の実施に課題を残した。
- ・「探究」の指導力について：本項目について、教員アンケートの平均値はある程度高いが、教員養成課程や制度研修で系統的に学んでこなかったこともあり、戸惑う教員も多い。優れた研修はあるが、場当たりのではなく、主体的で系統的な「研修」を開発・実施する必要がある。

### ②GAP「体験」と「探究」の関係性について

- ・グローバル&ローカルな体験（研修）は、課題研究にとって重要なことである。本校の場合も「震災・復興・減災（DR3）プログラム」では、研修と個人の課題研究が直結したケースも多かったが、本校がグループ研究ではなく、個人研究を重んじていることもあって、「多様な」研究テーマを持つ生徒を、同時に、訪問先や行程を踏まえた海外研修に組織することは難題であった。しかし、研修（体験）に課題研究をリンクさせるために、研究テーマを教師サイドから与えることには疑問が残る。

### ③「生徒の自己評価」と実施アンケートについて

- ・生徒の「課題研究力」、「国際的関心」は明らかに上昇しているのに、「満足のいく研究ができた」、「満足のいく論文が書けた」、「国際的な大学・学部に進学したい」、「海外に留学したい」、「国際的に活動する仕事につきたい」等の項目で生徒の評価が低く、さらに学年進行で低下する傾向がみられた。これは、メタ認知の上昇が要因と考えるが、適正な評価のためにも質問紙作成について根本的な検討が必要である。

## (7) 今後の持続可能性について

- ・ユネスコスクールとしての活動を継続すると共に、「生涯を通して新たな価値を創造し続ける文理融合型人材の育成」を研究テーマとしてスーパーサイエンスハイスクール（以下、SSH）指定に申請しており、この2つの取

組を通して、これまでのSGHの実践を持続させる予定である。

- ・課題研究については、基本的な枠組みを継承しつつ、前期課程（中学）3年生も含んだ学年を越えた生徒を組織してゼミ方式で行う予定である。また、特設科目「ESD」は高等学校公民科設定科目として継続するほか、新たな教科横断的科目を設定する予定である。
- ・海外研修については、グローバルサイエンスの枠組みで実施してきた、米国シアトル研修と英国ケンブリッジ研修については、SSH事業として継承する。また、アジア研修（ベトナム・カンボジア・台湾）については、ユネスコスクールとして継承したいと考えている。
- ・ただし、SSHに指定されるか、指定されたとしても資金の使途の問題がある。大学のプロジェクト、ユネスコスクールのプロジェクトへの応募も検討しているが、予算的な見通しが立たない限り、順調にいかない面も想定され、事業の縮小や取捨選択が迫られる。
- ・管理機関の関わり方としては、SGHで培ってきたESDについて、新たに申請するSSHでも開発課題の1つとして取り組む予定である。大学で展開するESDコースと連携を強化していく予定である。課題研究については、前述のとおり、新たに申請するSSHでは前期課程の生徒も含めた4学年合同ゼミを進めていく予定である。このプロジェクトを支援するために、大学に「SS推進アドバイザーボード」を設置し、これまで以上に課題研究への支援を行う予定である。国際交流については、SSHのなかで継続できないものがある。交流活動を維持していくために、大学が実施するプロジェクトと連携していくことができないか、今後検討を進めていく予定である。

#### 【担当者】

担当課	神戸大学附属学校部	T E L	078-851-4077
氏 名	前川 隆志	F A X	078-851-9354
職 名	専門職員	e-mail	<a href="mailto:sch-soumu@office.kobe-u.ac.jp">sch-soumu@office.kobe-u.ac.jp</a>